自閉症スペクトラム児と保護者の関係を支える RDI の検討

Modification process of relationship between parents and child with ASD in RDI

高橋 ゆう子 [1]
[1] 大妻女子大学家政学部

Yuko Takahashi[1]
[1]Department of Domestic Science, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：自閉症スペクトラム，養育支援，RDI，関係性
Key Words: Autistic spectrum disorder, Support of parenting, Relationship development intervention, Relatedness

抄録

本稿の目的は，保護者が子どもと RDI（Relationship Development Intervention；対人関係発達指導法）に取り組むことによって，親子のやりとりにどのような変化がみられるか，その特徴を保護者の視点から検討することである．2 家族の研究協力のもと，5 歳と 7 歳の自閉症スペクトラムと診断された男児の保護者に RDI によるコンサルテーションを行い，日常生活における親子関係に関する報告と，やりとりのペースや視線や感情，経験の共有に焦点をあてた RDI のビデオ・クリップとそれに関するリフレクション・ペーパーを分析の対象とした．

2家族の保護者ともビデオ・クリップを通して，子どものことだけでなく，自身の関わり方について，言葉による指示や説諭が多いことに気づいた．そこで，非言語的なコミュニケーションを意識することを試みた結果，しだいにかかわり方が少しずつ変化するようになり，子どもも保護者を参照する機会が増えるようになった．以上から，養育支援にあたっては，保護者の振り返りや子どもとやりとりする際の感情に焦点を当てることの重要性が示唆された．

1．問題と目的

RDI は，アメリカで開発された自閉症スペクトラム症（Autistic Spectrum Disorder,　以下，ASD と略す）の方とその家族を対象にした治療的療育法である．このプログラムは，障がいの特徴の理解や対応の工夫という観点よりも，保護者の養育支援，家族による発達促進をサポートすることに重点を置き，定型発達児のような対人関係と変化の多いさまざまな状況への対応能力を，保護者との関係において育てることを目標にしている．具体的には，日常生活の中でゆっくりとしたペースでやりとりすること，感情や経験の共有を意識すること，非言語的コミュニケーションを活用することなどを重視して養育者が，適切に子どもを導くガイドとなることをめざす．

ASD と診断，または推測される子どもに対する援助としては，日常生活で問題になりやすい行動の改善が図られることが多いが，最近は，社会性に目が向けられるようになり，そのスキルを伸ばしていく方法も紹介されるようになっている（Greenspan, 2009; Prizant B. M ら, 2006）. これらはいずれも，子どもの個体としての能力に焦点を当てたもので，なかなか身につきにくい力を種々の援助技法を通してスキルアップすることが期待されている．

一方 RDI では，ASD の症状・状態の出現仮説を次のように考える．遺伝的要因などに起因する，脳内の機能障害が起こると，脳内の情報処理の不安定さ・機能不全を招き，人生のごく初期段階において養育環境への適応困難が起こる．具体的には，子どもは，環境からの刺激や養育者の働きかけに対して，適切に受容したり，対応したりすることができず，過敏・過剰あるいは過鈍・過少な反応を示す可能性が高くなる．一方，養育者は予想外の子どもの反応にうまく対処できず，働きか

けもうまくいかないため，混乱や不安，焦りが増してしまい，不適切な養育状態になりやすくなる．

このような状況においては親子，それぞれの意図とかかわりにずれが生じるため，結果的に悪循環の状態になっていることが懸念される．さらに親子の相互行為や情緒的関わりの調整がうまく機能しないため，人との関わりに必須の信頼・愛着関係の形成や発達が困難となり，人との関わりを介した発達の機会が奪われることになる．成長に伴って集団生活の参加や適応が求められたとしても，そのような状況に対する発達的なレディネスが不足しているため，うまく対応，適応することができない．以上のような仮説にもとづき，RDI では，認知的見習いの姿勢の修復・獲得（大人の傍らでわずかに関与しながら学ぶ）と Guided Participation Relationship の構築，および修復（導く大人と導かれる子どもとの信頼関係作り）を試みる．Guided Participation は，Rogoff（1990）が使った用語で，「導かれた参加」と訳されている．これは，指導的かかわり合いに加えて，意図的な指導がなくても，子どもたちが他者のすぐ傍らにいたり，距離をおいてかかわったりする中で，コミュニティの実践，価値観，技能に参加することに焦点を当てる（Rogoff, 2003）．具体的には，定型発達過程のやり直し，保護者のガイド役割・能力のエンパワーメントを行うことになる．

このような ASD の症状，状態の発症仮説は，生物学的基盤に根ざすところの環境と情緒的意欲的関係性（relatedness）の障害として自閉症を捉える考え方に基づいている（Hobson,1989; Beurkens, N. M.ら, 2013）．これまで，発達研究や発達支援において，「情動」，「認知」，「意志」などの機能に分けて検討されることが多く，その限界を Hobson は指摘したが，それらを踏まえて対人関係性（relatedness）に着目した，具体的な支援を Gutstein（2009）が RDI を開発した．

本報告では，保護者が ASD の子どもと RDI に取り組むことによって，やりとりにどのような変化がみられるか，その特徴を保護者の視点から検討することを目的とした．

2．方法

2.1.　対象家族の概要

今回，RDI に取り組む 2 つの家族を対象とした．家族 A は両親（30 代後半），7 歳男児（対象児 A 小 2），4 歳弟の 4 人家族で，家族 B は両親（30 代後半），5 歳男児（対象児 B 幼稚園年長），2 歳妹の 4 人家族である．主訴とその当時の子どもの状況は表 1 の通りである．

表 1.　対象児の状況

対象児 A（7 歳）	対象児 B（5 歳）
IQ 100 やや上（5 歳時） 一番へのこだわりが強い．譲ることが難しい．やる気があるときとないときの差が大きい． 小学校で，集中が途切れると，椅子に座っていられず，床に横になる．	IQ81（4 歳時） 一方的に話してしまうことがあり，相手の様子がきにならない．やや吃音がある． 幼稚園でマイペース，周囲と同じように動けず，出遅れることが多い．

対象児 A は始め，落ち着きの無さや感情のコントロールに難しさがあり，動作法を適用したところ，改善が見られた．そこで，対人関係能力の向上に焦点をあてることを報告者が提案し，RDI を始めることとなった．対象児 B は，幼稚園での子どもとのやりとりに母親が不安を感じ，コミュニケーションの重要性は理解していても，子どもにどうかかわったらよいかわからず，RDI に興味をもった．

2.2.　コンサルテーションの方法と期間

RDI では直接会ってコンサルテーションを行うほか，インターネットのラーニグシステムを使って家族とコンサルタントが，メールやビデオによるコミュニケーションを行うことが特徴的である．具体的にはまず，親子の相互行為として，Collaboration（協力），Joint Attention（共同注意），Experience Sharing（経験の共有），この 3 つのアクティビティを通してアセスメント（RDA）を実施する（Larkin, F.ら, 2010）．その後，先のシステムにあるプログラムにしたがって，コンサルタントがデモンストレーションを行ったり，ラーニングシステムにある参考映像を参考にしたりしながら日常生活でガイドすることについて話し合い，親子で何か一緒に行ったやりとりを録画する．さらにそれを共有しながら，そのやりとりについて特徴について話し合い，次の課題となることについて一緒に検討していく．その期間は家族 A が約 2 年，家族 B は約 1 年である．

2.3.　コンサルテーションの方針

家族 A 及び B に RDA を実施，両親とその映像を元に協議した結果，どちらの家族の両親も言語的なコミュニケーションが主で，非言語的なコミュニケーションが少ないことが確認された．具体的には視線の共有ややりとりにおける表情，発声のトーン，しぐさなどの活用はかなり少なかった．さらに，両親の印象として，対象児 A，B とも，主張が激しいときと興味を示さないときの差が激しいことが挙げられた．

RDI では，Co-regulation（共同調整），Eye contact（視線の共有），Emotional regulation（感情の共有），Social reference（社会的参照）を重視し，安定した親子関係の築き直しを図る．ASD 症の子どもには，人と繋がろうとする基本的な欲求が強くないため，定型発達の子どもと親のような情緒的な関係がもともと築きにくいといえる．

そこで，コンサルテーションでは，日常生活では言葉を少なくすること，そして表情やしぐさなどを多くすること，やりとりのペースを遅くすることを心がけ，子ども自身が感じたり考えたりする機会，また，相手が感じていることに気づく機会を増やすことがねらいとなった．

2.4.　分析の対象

まず，録画された親子のアクティビティに関して保護者のリフレクション・ペーパーとビデオ・クリップである．RDI の課題に取り組むことによって親子の関係性が，どのように変化したと保護者が認識したか，上述のシステムに記述された内容を対象とした．また，面接のときに日常生活におけるやりとりについて感じられた変化として報告された内容も加えた．さらに基本的に子どもとの関係や親の役割についてどのように認識しているかについて，PCIT 親子関係インベントリーを実施，回答された結果を対象とした．

3．結果

3.1.　家族 A の変容

RDI 開始当初と約 1 年後の RDA を保護者に振り返ってもらったところ，最初は，子どもの「うまくできない」行動への記述が多かったが，1 年後，「楽しそう」「相手の様子を伺う，反応を楽しむ」など，子どもの様子に対する気づきに変化が見られた．両親の関わりについて 2 回の RDA の映像を比較すると，説明しようとする態度が減少し，両親の表情にも感情が現れやすくなった（表 2 参照）．

表 2. 家族 A の変容過程

	両親	子ども	学校
初期（小2）	自分自身の感じを表現しながら子どもとやりとりすると，少し違う感じ． 今まで言葉での説明が多かったことに気づく．	思い通りにならないとパニックになり，何も耳に入らなくなる． 場所を変えると落ち着くが，時間がたつと，な何事もなかったかのよう．	ちょっと変わった面白い子と思われる． 女の子と遊ぶことが多い．
中期（小3）	子どもの気持ちの変化に気づきやすくなる． 子どもとのやりとりについて夫婦で互いに指摘するなど，話機会が増える．	両親の視線に気づき，「しまった」という顔をしたり，恥ずかしそうな表情をしたり． 前の出来事を振り返って話す時がある．	男の子と遊ぶ機会が増える．うまく周囲に合わせながら遊べる．
後期（小4）	子どもが努力している感じがわかる． 子どもの感情と自身の感情や関わり方が関係していると気づく．	思い通りにならないとやや不安定になるが，パニックのようにはならない．	友達関係が少しずつ変化してきた．

3.2.　家族 B の変容

当初，両親とも映像を撮ることに抵抗を感じたが，自分の姿を振り返ると同時に，次第に子どもの表情や動きのわずかな変化に気づくことができ，教えるというより，自身の関わり方を見直すことによって，親子関係も変えたいと思うようになった．実際，名前を呼ぶなどの声かけが減少し，表情豊かに子どもとやりとりする様子が増えた．父親も課題に取り組むことで，普段の関わり方で考えさせられ，気づくことも多いと述べた．元々穏やかで，子どもに合わせる感じが強かったが，ペースを変えるなど調整を試みることで，子どもと視線を共有したり子どもが父親を参照したりする機会が増えた（表 3 参照）．

表 3.　家族 B の変容

	両親の変容	子どもの変容	幼稚園・小学校での様子
初期（幼稚園年長）	注意すると泣いてしまい，どうしてよいかわからなかった． 絵カードなどを使ってダメなことを伝えるが，状況に応じてどう教えたらよいか悩んだ．	自分でできると，一人でやってみせようとする． 自分からアイディアを出して，それに合わせてほしい感じ．	話したいことを一方的に話して，友達に嫌がられても気づかない． 友達との距離が近すぎて，遊びを断られても気づかない．
後期（小1）	映像や課題を通して普段の生活でのいろんなかかわりを考えるようになった． 「撮影しておけばよかった」と後から思うときがある．	「俺ね」など，どんどん話すことが減る． 確かめるような視線を母に向けることが多くなる．	春の行事ではそわそわして落ち着かず目立っていたが，秋の運動会では，落ち着いた感じが見られた． 周囲を見て，動けることが多くなった．

3.3　子どもとの関係や親の役割や状況に関する意識

家族 A，B の両親に回答を依頼したので，4 人分の回答が得られた．子どもの教育について積極的に取り組もうとしていることがわかった．具体的には，「私は，子どもがいるからこそ，得られたものがたくさんあると思う」「害のあるものことから子どもを守るのは，親の責任である」「親であることは，私の人生において，最も重要なことの一つである」「私は，ありのままの子ども（いいこともそうでないことも含めて）を愛している」という項目に対して 4 段階評定で 3 人が「かなりそう思う」を選択した．一方，「私は，子どものことを心配したことがない」「子どものことでどうしてよいかわからなくなってしまったことがない」「親は，親自身が持てなかったものを，すべて子どもに与えるべきだと思う」については，3 人が「ほとんど思わない」を選択した．

4．考察

4.1.　子どもの変容

対象児 A，B とも，保護者を参照する機会が増え，相手の表情や声の抑揚などにも注意が向けられるようになったため，結果的に一方的と思われるような話し方が減少したことが推測された．特に対象児 A の場合，学校での出来事の振り返りが，帰宅後になされることもあり，そこから，周囲の状況に目が向けられるとともに，過去に起こった出来事を保護者と共有するなど，保護者を始めとする対人関係のあり方が変化したことが推測された．

4.2.　保護者の変容

保護者 A，B とも，映像を通して自身の特徴に関する気づきが促され，子どもに対する関わり方が明らかに変化した．4 人の保護者とも子どもの教育に熱心であるがゆえに，子どもに対して冷静に説明や説諭しようとする態度が多かったが，その態度は，子どもとのコミュニケーションの幅を広げて導いていくのに相応しくないことがしだいに認識されるようになった．そして，指示的なかかわり（instructional）から，叙述的な言葉がけ（declarative）を用いること，さらに非言語的コミュニケーションを意識することで保護者も，子どもの気持ちが推測しやすくなり，わずかな変化に気づきやすくなったことが考えられた．RDI では，一人ではなく，複数の養育者の参加を促しているが，家族 A，B とも父親の取り組みが熱心で，そのことが母親の子育てに関する不安の軽減につながり，安定した家族関係の維持につながることが推測された．

関（1991）は，従来の日本における親子研究は，主として質問紙調査や面接に基づくもので，親子関係を直接的に観察するものは極めて少ない状況であったことを指摘し，さらに実験室場面での母子のやりとり（インタラクション）を，典型的な母子のパターンとみなしてよいかという疑問を投げかけた．本報告では，日常生活での親子のやりとりを録画したものを用いて分析し，検討を行った．実験場面のような統制がないため，変数も多く，分析は容易ではないが，日常生活でのやりとりの分析は，保護者自身の気づきを促し，子どものかかわりの変容に影響を及ぼしたことが推測された．

4.3.　親子関係を支えることの重要性

本報告を通して，日常生活における親子のやりとりや課題のアクティビティを録画して振り返ったり話しあったりするなど，映像を活用することに大きな意味があることが明らかとなった．多く

の場合，「はじめに」で触れたように，子どもの個体としての能力として社会性を捉えるならば，映像の中心になるのも，行動の分析の対象になるのも，子どもになるが，RDI ではそのようには考えない．親子の関係性に焦点をあて，子どもをガイドする保護者が，映像の中の自身の行為を振り返り，導き方との関係で子どもの発達を考えるという点が，RDI の特徴といえる．

Fogel（2008）は，もし，結果重視でゴールを想定した親子のやりとりだとしたら，そこには自発性は認められないので，人としての発達を支える関係には不十分である．子どもとのやりとりの中で自然に生じてくるようなアイディアにもとづいてやりとりを続けることが重要であるという．そうすることで子どもは，そのような保護者のアイディアに注目して，子どもも自然に自発的に自分の習慣やパターンを変化させていくというように，相互に影響し合いながらやりとりが深まるプロセスが関係を支えることになると指摘する．この指摘は，Rogoff のいう Guided participation relationship におけるガイドの役割に相当するといえるが，今回の 2 家族の事例検討から，ゴールを想定せずに自然に任せることは保護者にとって容易ではないことが推測された．

社会的なやりとりの多くは非言語的なものであり，わずかな表情の違い，身体の姿勢や動きのパターンなどで構成される（Scaer, 2005）．しかし Hobson（1989）が指摘するように，ASD の子どもは，身体接触を通じて情緒豊かに人と関係することや，シグナルに依存する非言語的コミュニケーションに障害がある．だからこそ，時間をかけて子どもとのやりとりに保護者が身を任せながら，子どもと時間を共有できるように工夫することが，支援する側には求められる．換言すれば，保護者が，早くから言語的コミュニケーションを用いて，子どもに社会性のスキルを効率的に身につけさせるという発想から転換をいかに図れるか，そして人々を相互に結びつけている関係性に着目することができるか，養育支援においては重要であることが示唆された．

謝辞

今回，研究協力を快諾していただいた 2 家族のみなさまに，心より感謝申し上げます．

付記

本研究は大妻女子大学「戦略的個人研究費」（S2620）の助成を受けたものである．

引用文献

[1]Beurkens, N. M. et al. (2013) Autism Severity and Qualities of Parent-Child Relations. Journal of Autism and Developmental Disorders, Vol.43, 168-178.

[2]Fogel, A. (2008). Relationships that support human development. In A. Fogel, B.J. King, & S. Shanker (Eds.). Human development in the 21st century: Visionary policy ideas from systems scientists. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

[3]Hobson, P. (1989) 認知を越えて－自閉症の理論，野村東助訳，In Dawson, G. Autism: Nature, Diagnosis, and Treatment. New York: The Giulford Press.野村東助・清水康夫監訳（1994）自閉症－その本態，診断および治療．日本文化科学社.

[4]Larkin, F. et al. (2010) The relationship Development Assessment - Research Version: Preliminary validation of a clinical tool and coding schemes to measure parent-child interaction in autism. Clinical Child Psychology, Vol, 20, No.10, 1-22.

[5]Rogoff, B. (1990). Apprenticeship in Thinking: Cognitive Development in Social Context. New York: Oxford University Press.

[6]Rogoff, B. (2003). The Cultural Nature of Human Development. New York: Oxford University Press. 當眞千賀子訳（2006）文化的営みとしての発達：個人，世代，コミュニティ．新曜社.

[7]Scaer, R. (2005). The Trauma Spectrum: Hidden Wounds and Human Resiliency. New York: W. W. Norton & Company.

[8]関　道子（1991）親子関係と幼児の発達につていの生態学的アプローチ，北海道大学教育学部紀要，No.55，9-21.

[9]Steven E, Gutstein (2009) The RDI Book: Forging New Pathways for Autism's and PDD with the Relationship Development Intervention Program, Connections Center Publishing.

Abstract

The purpose of this report is to clarify the feature of the modification processes in two families through Relationship Development Intervention (RDI). The participants were two families who each have a child with Autistic Spectrum Disorder (ASD). The children were 7- and 5-year-old boys, and they each have a sibling. They have continued to do RDI for two years and one year respectively. The modification process were analyzed by the parents' two types of reflection reports: 1) daily life in the relationship between them and their child, and 2) video clips of RDI activities focused on pacing, spotlighting, and sharing feelings. The results are as follows. In both of families, the mothers felt some difficulties in guiding their child compared with their siblings and worry about the relationship with their friends at the start of RDI. Each father has understood the mother's feeling and has participated in doing RDI. It was important for them to have the opportunities to discuss and consider interaction with child through video clips. They realized that they are apt to use a lot of instructions with words, and the necessity of making use of declarative words and non-verbal tools in their interaction. Their child has often come to guess their parents' reactions and as a result, decrease speaking one-sidedly at their own pace in their deeds. According to the results of the above case studies, the author focused on parents' guiding, not on improving the child's behavior. This report suggested that the importance of focusing on the parents' reflections, their feelings and emotions in interacting with their child.

（受付日：2015 年 6 月 29 日，受理日：2015 年 7 月 8 日）

高橋　ゆう子（たかはし　ゆうこ）
現職：大妻女子大学家政学部児童学科教授

筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修了．
専門は臨床心理学，臨床発達心理学．現在は，自閉症スペクトラム症の子どもと養育者，家族に対する支援について，子どもだけでなく，養育者との関係のあり方，関係性（relatedness）に焦点をあてた研究を行っている．